

施設入所者個別交流促進事業

マニュアル

～お友達プロジェクトについて～



神奈川県

令和4年度 施設入所者個別交流促進事業

目次

はじめに	1
I 運営について	
1 施設入所者個別交流促進事業（お友達プロジェクト）とは？	3
2 地域住民や学生等（お友達）の募集及び組織化の方法について	3
3 地域住民や学生等（お友達）の派遣調整の方法などについて	6
4 地域住民や学生等（お友達）の活動支援の方法について	10
5 地域住民や学生等（お友達）の活動報告の方法について	12
6 関係機関との連絡調整について	12
（参考）研修実施について	13
（参考）活動前の説明会で配布したチラシ	15
II 交流について	
1 交流アレコレどんな活動をしたの？	16
2 お友達へのインタビュー～それぞれの思い～	19
3 みんなで語る！～お友達懇談会～	23
4 「お友達プロジェクトをやってみて」～お友達PJスタッフ懇談会～	26
5 交流について施設からの感想	30
おわりに	32

はじめに



津久井やまゆり園友達プロジェクト東洋大学LEAFの活動報告にあたって

東洋大学社会学部社会福祉学科教授、社会貢献センター長 高山 直樹

2016年7月26日に、19名の利用者の命が奪われました。改めてご冥福をお祈り申し上げます。その後、110名の利用者の方々が横浜市港南区の芹が谷にある仮園舎に生活の場を移すことを余儀なくされ、今後、どこに、だれと、どのように生活をしていくのかを本人が決めるという、本人の意思をしっかりと踏まえた形での支援を目指し、神奈川県、かながわ共同会、津久井やまゆり園において意思決定支援を中心に据えた方向性が示されました。

同時に外部から意思決定支援専門アドバイザー（以下アドバイザー）がサポートする形で、意思決定支援の取り組みが始まりました。筆者はこのアドバイザーとして委託を受け、この試行錯誤の取り組みに参画しました。津久井やまゆり園の職員を中心に相談支援専門員等を核とした、担当者のチームが構成され、改めて本人の意思を探し出していく、確認していく支援が始まり、神奈川県、アドバイザーが支援する形で進んでいきました。

しかしながら、横浜という慣れない環境の中で、意思決定支援と同時に、利用者の方々の生活の安定を取り戻すという支援の両立がなかなか難しい現状がありました。場所は異なりますが、生活のあり方や日中活動の内容は以前と変わらない方法や環境の中で、本人の意思はどこにあるのかを探し出そうという流れになっていきました。

入所施設は、構造的に集団生活です。また人間関係のほとんどは、これまでの家族、職員そして利用者との関係がほとんどです。長く入所施設で生活すればするほど、そして職員が保護的に支援をするほど、利用者は自分で決めるということをしなくてもよい生活になってしまうという矛盾が出てきます。なぜ北欧でノーマライゼーションという考え方が生まれ、スウェーデンでは入所施設を解体したかという、人生の主人公として、生活の主体者として最も大切なことが、自己決定（意思決定）することであり、それを奪ってしまう構造があるからです。また自分で決めるという価値が国民全体に大切にされているからです。それはまさに民主主義が具現化しているといつてよいでしょう。

私たちは、これまで多くの出会いによって、さまざまな影響を受け、そして自らの存在を確立してきています。それは自らの意思を形成してきたといってもよいでしょう。その意味から、意思決定を推進していくためには、職員や家族でない、対等な関係の人との新たな出会いが意思決定において必要不可欠なのです。その取り組みが「お友達プロジェクトLEAF」でした。この企画に神奈川県が賛同してくださり、権利擁護を推進してきたNPO法人湘南ふくしネットワークオンブズマンが事業の委託先となり、LEAFの学生たちを支援していただきました。また、津久井やまゆり園の職員の方々が利用者とLEAFをつなげ、利用者との友達関係を築く工夫をしていただきました。感謝を申し上げます。この出会いによって学生たちが、友達、意思決定、幸せとは何かを改めて見つめることができたことは、この活動があり、利用者の方々から多くの「真実」を学びました。感謝をいたします。

保育学生が「お友達プロジェクト」に関わって

田園調布学園大学子ども未来学部専任講師 望月隆之

東洋大学LEAFが先駆的に取り組んできた「お友達プロジェクト」に、今年度、保育を学ぶ望月ゼミ4年生が関わらせていただきました。神奈川県は、障害者支援施設利用者への意思決定支援の全県展開を目指していますが、利用者が学生と友達関係を構築し、「友達が身近にいる」ということが利用者の意思形成や意思表示、意思決定、さらには意思実現に至るまで良い影響を与えるものであるということを実感しました。

具体的には、綾瀬市にある「貴志園」の利用者3名と交流をしてきました。コロナの影響によりオンラインでの交流を余儀なくされましたが、交流を重ねるにつれて利用者と学生が本当の友達ようになっていきました。学生と同年である女性利用者のSさんとの交流では、Sさんの「みんなに直接会いたい！」の熱意に応える形で、7月に施設内で直接交流することができました。また、10月にSさんの意思決定支援担当者会議にお友達として学生が参画し、Sさんを応援することができました。さらに三浦にある別荘で1泊旅行を一緒に楽しむなど、さまざまな形で交流し、関係を深めていきました。

交流の中でSさんは趣味のダンスやメイクのこと、これから施設を出て自立したいことや家族のことなどを学生に話していましたが、このことは学生の心を大きく揺さぶりました。ある女子学生は、「お友達プロジェクトではなく、本当の友達として何かできることはないか、もっと寄り添えることは出来ないかと考えてしまいます」と感想を述べました。東洋大学LEAFと同様に「友達とは何か」という根源的な問いに学生自身が向き合うことができたのではないかと思います。

Sさんは今年の3月に貴志園を出てグループホームに移行することになり、偶然にも学生の卒業のタイミングと重なりました。今後は、本当のお友達としてどのような交流ができるのか、模索していく段階にあると思います。直接的な交流の機会は減るかもしれませんが、スマートフォンなどのICT機器の活用も視野に入れながら、今後もお友達の関係が継続できるように支援していきたいと考えています。

共生社会の実現に向け、このお友達プロジェクトのさらなる発展を目指し、私自身も微力ながら関わり続けていきたいと思っています。本プロジェクトに関わる全ての方に感謝申し上げます。

1 施設入所者個別交流促進事業（お友達プロジェクト）とは？

その目的は？

地域住民や学生等の家族や支援者以外の第三者が「お友達」として対等な関係で施設の利用者とかかわっていくことで、生活関係の広がりや豊かさといった生活の質の向上、コミュニケーション力の発展、権利主体者としての意識の醸成、気持ちのよりどころの確保など、意思形成や意思表示の促進を図ることで。

親や職員には言えないんだけど、聞いてくれます？
の関係をつくることで、意思表示を！

支援したのは？

NPO法人湘南ふくしネットワークオンブズマン（通称Sネット）は、令和元年度から準備を始めて令和2年度より神奈川県の委託事業として、施設入所者個別交流促進事業（通称「お友達プロジェクト」）の活動を開始し、施設利用者とお友達の交流を支援しています。

Sネットは、神奈川県茅ヶ崎市に拠点を置き、施設へのオンブズマン活動や法人後見、茅ヶ崎市成年後見支援センター（市委託事業）、エンパワ・サロン（障がい当事者と市民のサロン）等を通じて、高齢者や障がいの権利を守り、「その人が決めた、その人らしい生活」を実現するための活動を行う法人です。

2 学生や地域住民等（お友達）の募集及び組織化の方法について

事業開始当初、神奈川県意思決定支援アドバイザーである高山直樹氏・望月隆之氏（令和3年度～）より、それぞれ所属する大学（東洋大学・田園調布学園大学）のゼミ生を紹介いただいたことが、「お友達プロジェクト」開始の発端でした。

その後、お友達をさらに増やすために募集チラシを作成して、他大学（関東学院大学等）の教授を通じて配布しました。

また、令和2年1月には、津久井やまゆり園芹が谷園舎（当時）に一番近い港南地区社会福祉協議会を訪問し、地域のお友達の開拓を試みました。生憎、令和2年2月より感染が拡大した新型コロナウイルスのために人との接触がしにくくなり、お友達募集活動も一時期進まない状況となりました。

**障がいのある人の
友達になってみませんか？**

●お友達プロジェクトへのご案内●

新型コロナウイルス感染拡大により、世界的に人とのつながりが制限されている現在。でも皆さんは、皆さんが生まれる前から、皆さんの身近で、人との繋がりが少ない中で暮らしている人たちのことをどう考えているか？

現在、横浜市港南区の芹が谷園舎にお住まいの、「津久井やまゆり園」利用者の人たちは、数回、施設の中で過ごしてこられました。4年前に大きな事件が起こったあと横浜に移り住み、いざ職員が中心となって、「将来どんな暮らし方をしたいか」意思決定の支援が行われています。でも、生まれてから今まで、家族や職員との接点が多く、対応におつきあいの経験や出会いが少ない中では、なかなか将来のことを考えていくのが難しいことがわかってきました。

そこで2年前、彼らに家族や職員以外の「お友達」をつくるプロジェクトが立ち上がりました!! 現在、学生さんと仲良くなった利用者の皆さんが、「楽しい」を言葉の裏面でも伝えてくれています。まだまだたくさんの「お友達」が必要です。支援者と利用者さんの関係とはもっとうまく、「普通のお友達」になっていただける方を募集します！

活動期間 令和3年4月～令和5年3月末まで（含研修）

活動日・時間 お友達と利用者さんのご都合に合わせて希望。（月1～2回、各30分程度）
※現在はオンライン実施ですが、今後、状況に応じて津久井やまゆり園等への訪問も実施

資格 特になし

対象 津久井やまゆり園芹が谷園舎（横浜市港南区芹が谷2丁目1-1）や、津久井やまゆり園から移行したグループホーム・施設等にお住いの知的障がい者

内容 お友達！人もしくは数人が一緒にあって、利用者さんとビデオ電話でお話ししたり、手紙でやり取りしたり、訪問できるようなになれば、芹が谷園舎内でお話ししたりお茶を飲んだり、一緒に園内をめぐったり、でも仲良くならだろ、もっと色々なことにチャレンジできるかも!?

活動謝礼 1回1,000円、交通費実費支給（原則ご自身の車や駅から神奈川バス「六甲四丁目」徒歩分）

問い合わせ 関東学院大学社会学部 委員会・服务部

企画 神奈川県（委託先：NPO法人湘南ふくしネットワークオンブズマン）

〒253-0843 神奈川県茅ヶ崎市元町5-22 永井ビル3階、（担当：上杉）

LEAFに込められた意味

Liberty …自由

Empowerment…エンパワメント

Advocacy…代弁

Friends…友達の輪

Leafは「葉」という意味

形や大きさが違っても同じ枝にまとまっている「葉」と、このプロジェクトで仲良くしていきたいという意味を重ねた

キーワードは**意思決定・意思表示・意思形成**

3

組織化については、まず東洋大学生の「お友達」が「LEAF」という独自の組織を結成し、交流を進めるために、代表・副代表を決めて、LEAF内での話し合いや研修を行いました。

実際の交流については、まず施設が作成した利用者の「利用申込み書」と、Sネットが用意したお友達の「自己紹介書」の記入提出をお願いしました。その上で、交流のための「利用者名簿」と「お友達名簿」を作成しました。

お友達には2～4人程度のグループを作っていただき、グループごとに利用者とのマッチングを行いました。発語のある利用者や発語のない利用者、性別や年齢、趣味嗜好等を考慮し、なるべく交流が続くようなマッチングを考えました。

「お友達名簿」については、登録用の他に、利用者に知ってもらうためのわかりやすい「お友達紹介名簿」をお友達自身に作成していただきました。

当初、学生と少人数の社会人で始めた交流ですが、利用者は概ね40～80代で高齢の方が多く、20代の学生さんたちとは世代ギャップがあると感じました。利用者の趣味や時代の流行もの（歌や芸能人等）が若いお友達には全くわからないこともあり、相づちを打てなかったり、言葉を聞いてから急いでパソコンを検索して調べたこともありました。

逆に、お友達と年が近い利用者もごく少数ですがおられたので、その利用者さんとは距離のない関係を早く築くことができました。

やはり、様々な世代のお友達がいると良いですね！また、お友達の方が、「元気？」といつでも気軽に訪問できる関係性の構築を目指しました。



(参考) 活動初年度に作成したチラシ

まずはお友達の募集を行うために、チラシを作成してこの事業に関心を持つ学生を呼び込みました。初年度のお友達として登録に至ったのは、男性2名、女性11名でした。(委託事業令和4年度は男性5名、女性21名)

障がいのある人の 友達になってみませんか？

●お友達プロジェクトへのご案内●

皆さんは、将来のことを考えることがありますか？「誰と暮らしたい？」「どこで暮らしたい？」「どんなことをして過ごしたい？」その時、それまでに会った色々な人・色々な場所・色々な経験の記憶が頭によぎりませんか？人間はそのように自分の人生で得たものを土台にしながら将来を考えます。

現在、芹が谷園舎にお住まいの、「津久井やまゆり園」利用者の方には、今、職員さんが中心となって、「将来どんな暮らし方をしたいか（意思決定）」の支援と確認がおこなわれています。でも、生まれてから今まで、家族や職員さんとだけしか接点がなかった知的障がいの方が多いため経験や出会いが少なく、対等におつきあひする関係の人もいない中で、なかなか将来のことを決めるのが難しいことがわかってきました。



そこで今回、彼らに、家族や職員以外の「お友達」をつくるプロジェクトが立ち上がりました!! 支援者と利用者さんの関係とはちょっと違う、「普通のお友達」になっていただける方を募集します!

**期間 令和元年7月5・12・19日(研修)
8月～令和2年3月末まで(活動)**

活動日・時間 (原則) 金曜日午後1～2時間 (月2回程度)
資格 特になし
対象 津久井やまゆり園芹が谷園舎 (横浜市港南区芹が谷2丁目1-1) に
お住いの知的障がいの方
内容 知的障がいの方1人にお友達2人が一緒になって、とりあえず、芹が谷園舎内でお話したり、一緒に園内をめぐったり。
でも仲良くなったら、もっと色々なことにチャレンジできるかも!?

※薄謝あり、交通費実費支給 (原則ご自宅の最寄り駅から神奈中バス「六ツ川四丁目」往復分)
茅ヶ崎市社会福祉協議会 行事用活動保険加入 (予定)

問い合わせ 上杉
企画 NPO 法人湘南ふくしネットワークオンブズマン

☎0467-85-6660

3 地域住民や学生等（お友達）の派遣調整の方法などについて

実施方法は？

① 活動参加申込み

お友達・利用者双方の活動参加者を募り、お友達は自己紹介書を提出する。利用者については職員等が利用申込書に記入して提出する。（8、9 ページ参照）

② 名簿作成

お友達・利用者双方の名簿を作成する。特にお友達については絵や写真を使った利用者にわかりやすい仕様の紹介書を工夫して、施設に渡す。

③ オリエンテーションを開催

お友達に対し、活動の意義や活動に入る前の注意事項を伝える。（10、15 ページ参照）

④ 見学会・集団での交流を実施（複数回）

日程を調整して、お友達が施設を訪問し、施設職員から説明や施設の紹介ビデオなどを視聴する。また、利用者とお友達を部屋に集めて自己紹介を行う。その後はテーブルごとに身振り手振りを交えて会話したり、一緒にトランプやビックリゲーム「黒ひげ危機一髪」を行ったり、利用者の作った作品を見せてもらったりして、緊張を解く。

⑤ お友達をグループに分ける

マンツーマンの交流だと緊張したり、急に1人が欠席すると交流が中止になってしまうので、2～4人程度のグループを作ってもらおう。

※ただし、グルーピングは必須ではない。

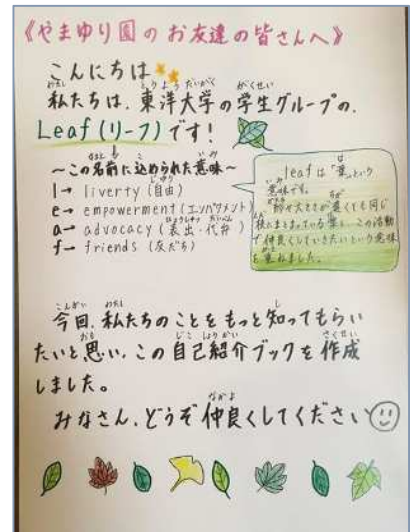
メンバー選択はお友達にまかせよう！
グループの名前もつけてもらおう！

⑥ マッチングを行う

利用申込み書の記載をもとに、利用者とグループのお友達の趣味や得意なこと、年齢や性別、人柄などを考慮し、対象となる利用者を1グループに対して1～2人決める。（但し、参加人数が少ない場合は思い通りのマッチングができないこともあると利用者、施設に伝える。）

⑦ 交流の日程調整

電話やメール・SNSで、お友達のグループと利用者の都合の合う日時を調整し、オンラインか施設訪問のどちらかの方法を選び、日時を決定する。決定は交流日の1週間前までに行う。※初回は利用者がお友達を把握しやすい訪問での交流が望ましい。



⑧ 交流実施

・ 施設訪問の場合

前日までに、当日、訪問する予定であることを施設に確認する。当日は時間までに施設に到着し、窓口で氏名の札をホルダーに入れて首にかける等して、施設内で利用者と交流する。場合によっては、何かを一緒に作ったり、サッカーなどのスポーツを行ったり、外出先で待ち合わせをして食事や映画鑑賞などを楽しむこともある。

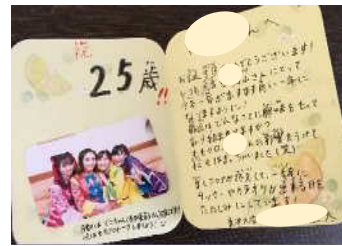
・ オンライン交流の場合

前日までにお友達が交流のためのURLを施設に送信する。Sネットは送信できているかどうかを確認する。当日になったら開始時間までにそれぞれのパソコンやタブレットで入室し、交流を行う。(Sネットは画面OFF・ミュートで交流に参加する)

できればお友達がアカウント取得するか、施設のアカウントを使用して時間制限のない交流を設定する。

・ その他の交流 (例)

手紙やビデオレターなどでも交流を行う。利用者の誕生日に向けてバースデーカードや、季節ごとのご挨拶(クリスマスカードや年賀状など)を送ることもあった。



⑨ 振り返り・報告書作成

交流終了後、そのままお友達・Sネット・職員で簡単に振り返りを行う。

また、SNS機能を利用してお友達に交流について気づいたこと等を送信してもらう。Sネットは、交流の内容について、日時・交流したお友達や利用者の氏名・交流の内容・かかった時間・お友達の気づき等をもとに、所定の用紙を使って報告書を作成し、施設に送信する。

⑩ 研修の開催 (数ヶ月に1度程度)

活動のヒントとなる研修を随時開催し、お友達の疑問や不安を解消し、円滑に交流できるようにする。(13 ページ参照)

⑪ その他のSネット動き

- ・ 2ヶ月に1～2回程度のスタッフ会議を行い、交流進捗状況及び必要な事項について打ち合わせを行う。また、必要に応じて随時県・園との会議を行う。
- ・ 必要に応じてお友達の組織化等の動きに協力する。
- ・ リモート環境を整備する。(必要機材の購入・各設定 等)
- ・ お友達に社会福祉協議会等で取り扱っている行事用保険登録を行う。
- ・ 必要(お友達募集等)に応じて外部機関に連絡・交渉する。
- ・ 機関誌などを通じ、活動の広報を行う。

(参考) 自己紹介書

(エントリーシート)

お友達申し込み用 自己紹介書

(写 真)

お手持ちの写真
で結構です。

ふりがな		
氏 名		
生年月日	年 月 日 (才)	男・女
現住所	〒	
連絡先	電話：	Fax：
	携帯 mail：	
	PCmail：	
職業		
免許／資格		
趣味・特技・得意な分野		
交通手段（自宅最寄り駅から交流する施設まで）及び交通費（往復）		

(参考) 利用申込書

施設入所者個別交流促進事業利用申込書

○利用申込日： R 年 月 日

○申込者： _____

○利用者名： _____

○年齢： _____ 歳代

○性別： 男性 ・ 女性

○コミュニケーション能力・方法：

○好き・喜び・楽しみ：

○医療情報（お友達が知っておいた方がよい事柄）：

担当チーム（ _____ ）

4 お友達の活動支援の方法について

令和元年度実績	交流回数 31 回	対象利用者 13 人	交流したお友達のべ 59 人
令和2年度実績	交流回数 59 回	対象利用者 17 人	交流したお友達のべ 160 人
令和3年度実績	交流回数 78 回	対象利用者 25 人	交流したお友達のべ 181 人
令和4年度実績	交流回数 94 回	対象利用者 25 人	交流したお友達のべ 259 人

① S ネット担当スタッフは、SNSのグループを使ってタイムリーにお友達と連絡を取り、交流の調整を行いました。

令和4年度は、東洋大学生8グループ（20人）・田園調布大学性1グループ（6人）と連絡を取り、交流日程や交流内容について調整しました。また、交流後の報告はSNSに添付してやり取り、必要に応じて対面でもお友達の相談を受けました。

② 事業開始時、津久井やまゆり園・芹が谷園舎（当時）にて、お友達対象の見学会を行いました。

園内見学及び園紹介ビデオ視聴のオリエンテーションを5回実施しました。また、室内でそれぞれの得意なことや好きなことを発表しながらお友達が自己紹介をしたり、テーブルごとの小単位に分かれて会話やゲームを楽しみ、今後の活動について打ち合わせを行いました。

③ 交流（オンライン・対面）には担当スタッフが同席・同行しました。（必要に応じて）



各グループが一人の利用者と交流する頻度は、2ヶ月に1～2回。それぞれの交流に、1～2名のS ネット担当スタッフがついて交流を見守り、必要なサポートを行いました。特にタイムキーパーの役目をする事が多く、利用者の様子を見ながら、ちょうど良い頃合いを見計らって交流時間の調整を行いました。

④ 登録したお友達の交流支援として、活動前研修（オリエンテーション）の他、年4回の研修を対面及びオンラインで実施しました。（13ページ参照）

お友達の意識の向上や具体的な交流のヒントとなる基調講演を行い、またその後、講師を交えてお友達同士のディスカッションを行いました。

研修は、活動のヒントやモチベーションの向上に役立つ経験や考え方を理解したり、障がいのある人が利用する基本的な制度や接し方のコツを知るために行いました。また、常に活動の振り返りを行い、それぞれのお友達の交流から学ぶ機会にもなりました。オンラインの利用によって遠方のお友達も時間をとらずに参加できたことは良かったと感じました。



⑤ 令和4年度、貸し切りバスを利用して津久井やまゆり園を訪問しました。

事業初年度は、東洋大学の学食に利用者をお連れする計画、令和3年度には田園調布学園大学生がカビーナ貴志園を訪問する計画を立てましたが、コロナ禍で中止となりました。令和4年11月に、学生17名が初めて津久井やまゆり園の新園舎を訪問しました。交流はコロナ禍で長い間オンラインとなっていました、やはり直接言葉を交わしてふれあう交流の方が、知的障がいのある利用者にとって、お友達を実感できる方法です。まずはバス等を使ってできるだけ多くのお友達の施設訪問を行い、利用者が住んでいる場所を知ってもらった上で、その後は個別やグループごとに交流を深めていけると良いと思います。



⑥ 交流後の振り返りや訪問時の職員との話し合いの時間を確保しています。

お友達や職員が、交流時に感じたことや気づいたことについて意見交換する時間を設定しています。また、必要に応じて電話やお友達の都合の良い場所に出向いて個別の相談を受けています。

例えば…

「交流時に近くにいる他の利用者の声が気になっているのでは？」

「夜間やお休みの日にもっと交流できないか？」

「利用者のこういうしぐさや行動は、どういう気持ちを表しているのか？」等々、直接お友達が職員とやりとりすることで、お互いに納得したり解消したりすることが多いのです。職員からも、お友達に尋ねたいことや理解してもらいたいことをお聞きし、貴重な情報交換の場となっています。直接施設訪問していた時には自然にできていた職員さんとの貴重な「余白時間」を、オンラインでは意識的に作っていくことが大事だと考えます。



5 地域住民の学生等（お友達）の活動報告の方法について

活動が終了したら、お友達がその都度SNSに書き込んだ気づきをSネットがまとめて指定の書式に書き込みます。その後、県・施設・関係者（相談支援事業者など）と共有しました。（コピーをSネットで保管しました）

この活動の目的は、利用者一人一人の意思決定に関して、当事者と対等な関係にある第三者の視点を活かし、より利用者の思いに添った支援に繋げることです。

利用者とお友達との交流の中に見えてきた情報を意思決定支援会議と共有するために、報告書の果たす意味は大きいと考えられます。

6 関係事業者との連絡調整について

交流の状況や課題について話し合うため、Sネット担当者間の会議を1～2ヶ月に1度、コロナ禍の影響を受けてオンラインで開催しました。

また、お友達とSネットスタッフは、常時SNSグループで情報を共有しました。内容は、交流やお友達の調整、研修企画についての連絡が主でした。お友達もSネットスタッフも、利用者を特定できるような記載は避け（利用者の個人名はアルファベットで表示）、個人情報守秘を徹底しました。

施設への連絡は、各生活課へ直接メールや電話で行いました。施設とお友達との情報共有に向けて、お友達と各生活課との話し合いも、必要に応じて設定しました。

オンラインを駆使しての連絡体制は必須のものでしたが、お友達一人一人の活動に対する個人的な思いは、やはり直接、対面で受け止める必要を感じました。共に行動し学び合い、意見を交わし合ったお友達とSネットスタッフは、委託事業終了後も強い信頼関係を持ち続けています。



(参考) 研修実施について

令和元（2019）年度

6月	第1回 事前研修（オリエンテーション）（東洋大学） お友達プロジェクトの意義、活動に入る前の注意事項を伝える（14ページ参照）
10月	第2回研修（東洋大学） 高山直樹氏講義とディスカッション 活動の振り返り、課題共有、話し合いを行う
12月	第3回研修（ウィリング横浜） サポートスタッフ（NPO法人湘南ふくしネットワークオンブズマン＜Sネット＞）講義とディスカッション サポートスタッフSネットの思い・課題を共有、活動の振り返り、話し合いを行う
3月	第4回研修 → 新型コロナウイルス感染拡大のため中止

令和2（2020）年度

8月	第1回研修（オンライン） 又村あおい氏（全国手をつなぐ育成会連合会事務局長）講義とディスカッション 講義「知的障がいのある人にお友達が必要なワケについて」とディスカッション 障がい福祉サービスの制度説明とお友達プロジェクト活動の意義について学ぶ
8月	第2回研修（オンライン） 小野田智司氏（藤沢育成会施設職員）講義とディスカッション 講義「知的障がいのある人とのコミュニケーション」とディスカッション 知的障がいに関する基本情報や接し方のヒントを学ぶ
11月	第3回研修（オンライン） 高山直樹氏講義とディスカッション 活動の振り返り、課題共有、12月の県主催共生フォーラムの発表内容について話し合いを行う
3月	第4回研修（オンライン） 高山直樹氏講義とディスカッション 年間振り返りと来年度の活動について話し合いを行う

令和3（2021）年度

6月	第1回研修（オンライン） お友達活動発表とSネット概要説明ディスカッション 高山ゼミ内で、お友達の発表、Sネットの概要と権利擁護活動の実践紹介を行う 高山ゼミ内で、活動に興味を持ってくれる学生をお友達候補として募る
10月	第2回研修（オンライン） 学生主催、お友達からアドバイザー会議へ提出した手紙等について 施設対応（利用者の写真公開の可否判断）に疑問をもつお友達から施設への手紙内容について、学生主体で話し合う

10月	<p>事前研修（第3回研修）（オンライン） 望月隆之氏講義と田園調布学園大学の学生・カビナーナ貴志園利用者との交流について</p> <p>講義「お友達プロジェクトの意義」とカビナーナ貴志園との交流について、活動に入る前の注意事項を伝える</p>
3月	<p>第4回研修（オンライン） 高山直樹氏講義とディスカッション</p> <p>講義「津久井やまゆり園意思決定アドバイザーとしての活動評価」と活動振り返り、来年度に向けての話し合い</p>

令和4（2022）年度

7月	<p>第1回研修（オンライン） 武居光氏（青丘社 相談支援専門員）講義とディスカッション</p> <p>講義「友活しようよ！知的障がいがある人との愉快的日々」とディスカッション 知的障がいのある人の友達とは何か、講師の実経験から学ぶ</p>
7月	<p>第2回研修（ウィリング横浜） トーキングマット基礎研修</p> <p>トーキングマットを使用して障がいのある人の思いを聞き出す体験を行うコミュニケーションツールの一つとして考える機会とする</p>
2月	<p>第3回研修（ウィリング横浜） お友達の活動発表とディスカッション</p> <p>学生グループ（アルク・コーラー・ぞうさん・BOYS・田園調布大）による4年間の活動まとめを発表する</p>
3月	<p>第4回研修回（ウィリング横浜） 講義「友活しようよ！知的障がいがある人との愉快的日々Part. 2」とディスカッション</p> <p>第1回研修の際には武居氏の話をお聴講できなかったお友達（東洋大学3年生）をメインに、活動の中での課題を話し合う</p>



(参考) 活動前の説明会で配布したチラシ



お友達になる方へ「活動時に気をつけること」

「活動」の際に気をつけてほしいことを、少しでもお伝えします！

1. 無理をしない

せっかく「お友達」になってくれるのに、長続きしないのは寂しいです。

ご自身のライフスタイルやご家族など周囲の理解を得た上で、余裕を持って笑顔でご参加ください。

2. 約束・ルールは必ず守る

時間は守りましょう！→無断で遅刻、欠席、守れない約束はしないでください。

都合が悪くなった時には必ず電話で連絡してください。



3. 相手や関係者の立場を尊重しよう

相手への理解、様々な立場の方との連携を尊重しながら活動しましょう。

相手の方は、あなたより年上かもしれません。お名前の呼び方や接し方は相手の年齢相応でお願いします。

4. 個人情報の保護について



活動中に知りえた個人情報等の取り扱いには十分注意してください。

あなたの個人情報（住所や電話番号等）も簡単に教えないように・・・。

活動の様子をスクショ、sns への無断転載等は禁止です。

報告書等書式に残すときには、相手のお名前はイニシャル表記にしてください。

5. 動きやすい服装で！（対面時）

華やかな服装、アクセサリーは避けましょう。長い髪はまとめてもらえると助かります。



6. 「報告書」は、なるべくその日のうちに書きましょう。

リモート時→ZOOM のチャット機能に、交流が終わった時点で今日の感想などを書き込んでもらっています。当日のホストがそれをグループ担当スタッフにコピーして送ってください。

対面時→活動終了時にその場で記載してください。

7. 困った時にはスタッフに応援を頼みましょう

ひとりで抱え込まないで！わからない時、困った対応を受けた時には私たちスタッフにご相談ください。



II 交流について

1 交流 **アレコレ** どんな活動をしたの？

～ 実際の事例紹介 ～

その1： めざせ！とものつくるラーメン「醤油味」



高齢男性3人グループといつもまったり交流するお友達2人。「日なたぼっこ」な感じのオンライン交流は、焦ることもなく、みんなで黙ってニコニコするだけのこともある、自然体のひとときとなっています。

最近、コロナウィルス蔓延のために外出の制限があるせいか、利用者のおひとは、しきりに「コロナ早く直して（感染終息させて）くださいよ～」を繰り返しておられます。また、「お友達がたくさんほしい」「外に行きたい」といったご発言も度々ありました。言葉の端々から、コロナ禍が利用者に大きなストレスを感じさせていることがよくわかります。

このグループでは、コロナウィルス感染拡大の直前に、「みんなで一緒にラーメンを作って食べる！」という計画を進めていたのですが、まだ実現していません。（執筆時点）なので、話題はもっぱら「ラーメン」のことが多く、「ラーメン、何味が好きですか？」→「醤油ラーメン！」等、会話がラーメンを通じて展開することが多いようです。お友達からは、高齢の利用者に対し、「早くこの計画を実現したい。もしかしたら、時間があまりないかもしれないから…」といった気遣いの言葉も出始めています。



その2： 寝ちゃっても…「お友達」！

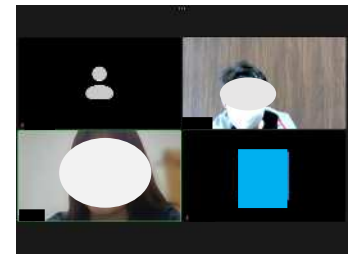


「Aさん、お久しぶりです。こんにちは！」の声掛けに、バンバン手を叩いて喜ぶ女性利用者Aさん。コロナ禍で長いことオンラインでの交流しかできなかったお友達も嬉しそうでした。某アイドルグループが大好きなAさんのために、お友達がアイドルの写真を貼った「うちわ」を作ってAさんに送り、画面越しに一緒に振って楽しんだり、会えない間も色々な工夫をして交流を繋ぎました。

また、もう1人の女性利用者Bさんとの交流で印象的だったのは、交流中にウトウト眠ってしまったBさんを職員さんが身体を揺すって起こそうとした時、お友達が、「眠っているのを無理に起こしてまで交流するのはお友達関係とは言えない」と感じたこと。「私たち（学生）の間にも、お喋りしている間に寝ちゃう友達とかいますよ。それはそれでいいと思う。」という感覚は、お友達としてごく自然なものだと思います。

その3： わたしの支援会議に「お友達」も呼んで！

女性利用者Cさんが交流しているグループは、交流が始まった頃からはとにかく楽しい「お喋り女子会」！お友達が施設に訪問した初めの頃は、皆の楽しい笑い声が訪問室の外まで響いて園長（当時）もビックリ。コロナ禍で訪問ができなくなった後も、お友達はビデオレターを送り続け、オンライン交流が始まってからも、「会えないことは残念だけど、こうしてお話できることが嬉しい！」とCさん、「会う度に私



たちを気遣うような言葉や『ありがとう』と感謝の気持ちを伝えてくれるので、Cさんは私たちに幸せな気持ちにさせてくれます」と、お友達。その後、施設からグループホームに移ったKさんですが、通所先から今も定期的にオンラインで交流が続いています。なにより驚いたことに、定期的に開催されるCさんの支援会議に、Cさんの方から「私のお友達にも出席してほしい」と要望がありました。コロナが少し下火になった時は、バスでお友達が施設訪問し、お互いに「会いたかった～！」とハグする場面も。交流を通じて、確かな友情が芽生えているのを感じます。

その4： いっしょに♥ポッチャで仲良しに



まだ交流を始めて間もないグループですが、発語のほとんどない男性利用者DさんやFさんとのやり取りは、障がいのある方と初めて接するとは思えない程、和やかでナチュラル。でも職員の方から、「やはり対面の方が交流しやすいかも」ということで、施設訪問しての交流が実現しました。

交流をするためには、何かを一緒に楽しむのが良い！と思った職員の提案で、「ポッチャ」をすることになりました。初めはお友達に慣れなかったDさんですが、一緒にプレイすることで次第に表情も和らぎ、お友達とのやり取りもスムーズに。オンラインでの交流でも自然体でDさんと接していたお友達でしたが、やはり対面での交流は手応え満点！この日訪問した別グループのお友達からも次々に「また来たい！」と声が上がりました。



その5： やったね！映画「スラムダンク」な日々

かねてより心待ちにしていた男性利用者Tさんとの外出の日。お友達は、事前に上大岡駅のデパート前を待ち合わせ場所に決めてFさんとお会いしました。前回の交流時、この日を楽しみに、Fさんもお友達も「スラムダンクのコミック全巻読んでこよう」という話題で盛り上がりました。当日はお互いコミック全巻を揃えて年末年始で読破してきたことに触れ、始まる前から映画の話題に花が咲きました。つきそいの職員さんも含め、若者メンズ3人グループで全く違和感を感じない場が形成されていたことが



印象的でした。そして、上映後、「感動しましたね！！」とお友達が伝えると、Fさんはガッツポーズをして拳を突き合せてくれました。



終わってみればあつという間の楽しい時間だったというのが、お友達の正直な感想でしたが、「一緒に外出」した経験は、Fさんにとって自分の意思決定の大きな満足感や達成感につながった交流になったと感じます。

今回の映画鑑賞のきっかけはFさんとのオンラインでの会話の中から生まれました。あらかじめ園で決められた外出行事や日中活動ではなく、一緒に話す中でやりたいこと、観たいものを共有していったことが楽しみにつながりました。

施設の中で生活しているだけでは不要となる選択肢を選ぶことが次々と必要になってくる、という意味で、地域に出るといことが結果的に意思決定の幅を広げることだと改めて感じました。外出の機会が多くなっていくことで交流のチャンネルを増やしていくことは大切です。その実現には、現段階ではやはり仲介となる職員の理解が欠かせません。課題もあるかもしれませんが、今回の外出は職員との協議も重ね、環境が整って初めてできたものだと思います。



その6： はじめてのお泊まり交流



年末にコロナで延期になった「お泊まり」がやっと実現しました！目指すは三浦のカバーナ貴志園別荘。男性利用者Gさんと女性利用者Hさん、そしてお友達2名で園のバスに乗り合わせ、宿に着いた後はみんなで海を散歩したり、人生ゲームやUNOで盛り上がりました。人生ゲームは利用者には難しいかな？と思っていたのですが、思いのほか楽しめました。そして夜はもちろん、鍋！アツアツの白菜・きのこ・魚や鶏をほおぼりながら、「みんなで食べるとこんなに美味しいんだ〜。」と呟くYさんの嬉しそうな笑顔が印象的でした。消灯は22時だったけど、女子会の方は0時過ぎまで続き、一緒に泊まった職員からは、「みんな（利用者と）年が近い人たちだから、すごく話ができてよかった！」と褒められました。

お友達の1人は、大学を卒業したら障がい福祉サービス事業所に就職するというので、「この活動をしてから障がいについてのイメージが変わりました。障がいのある人にどうやって関わればいいのか、という道が開けた気がします。」と思ったそうです。お互いの距離が縮まったひとときとなりました。



2 お友達へのインタビュー～それぞれの思い～



●ゆきえさん

会ってサッカーする時など、利用者さんと何かを一緒にする時間が楽しかった。オンラインで交流するのと直接訪問するのでは、距離感が全然違う。直接会った方が「友達」としてどうやっていくのかに集中できる。自分自身が子どもの時は障がいのある人が怖かったけれど、この事業に参加した今は「案外普通の、ちょっと癖の強い人」というイメージが変わった。また、その人の障がい特性を知ってからは、何かの行動に対してその前後の状況を知ること、「こうしたらこうなるよね」と、納得することができるようになった。以前の交流で、「利用者さんの行動を全て受け止めないと関係が悪くなる」と思い込んで、利用者さんとの距離を詰めすぎていた時期があった。利用者さんも私たちに接近しすぎていて、「職員さんはなぜこの状態（接近）を止めてくれないんだろう」と思ったことがあった。「職員さんは私たちと違う感覚なのか？」と思っただが、職員さんは24時間利用者さんと共に生活しているから、利用者さんの行動を、自然に当たり前を受け止めていることが後でわかった。利用者さんと関わる上で必要な情報を、職員さんのように学ぶことが大切である。また、オンライン交流の方がむしろ良い距離感を保てる利用者もいることがわかった。今後の活動継続については、利用者さんは発語がなくても例えば「友達が変わる（交代する）」ことについては気づいてしまうと思うので、個人的には固定の利用者さんとの関係を続けたい。ここに至るまでの貴重な経緯をなくしてしまうのは勿体ないと思う。



●あつこさん



交流の中で、自分の好きな話もできたし、利用者さんだけではなく、他の「お友達」からの反応ももらえたことが嬉しかった。また、オンラインとなったことで、コロナでなかなか人と話す機会が減る中での、「定期的な（コミュニケーションの場の）約束」ができたことが嬉しかった。交流を通じて、施設とお友達の間でのコミュニケーションが不足していると感じたことがあった。またオンラインにおいては、利用者さんの「視覚」「聴覚」の情報を知っておかないと交流が難しい部分があるので、そのことについての情報が欲しかった。また、「お友達」側の、事業に対するモチベーションや考え方にも個々に差があると感じた。

「お友達」は、自然にその関係性ができていくものなので、そこを意識して活動を作らなくてはいけないと思う。今後もこの活動を広げたい。職員さんの中には、「(常に自分は)利用者さんの意思をくみ取っている」と思われている方が多かったが、日常レベルの意思は「お友達」の方が聞き取れるように感じた（だから「お友達」は必要）。障がい者は、「わからない」から「怖い」となる。「お友達」として接し、ダメな時はそれも仕方ないと思うが、ただ障がいがあることだ

けで根拠なく怖がることは差別に繋がる。この事業は、障がい分野だけでなく、子ども・女性・高齢者など、コミュニケーションの場が不足している対象全てに広がってほしいと思う。

●さきこさん

利用者さんと直接お話しできることが楽しかった。また、相模原の事件に対して、社会貢献できるという気持ちもあった。交流を重ねる中で利用者さんの口数がどんどん増えていったことも嬉しかった。そして今は、利用者さんとなるべく早い時期に一緒に活動したいと思っている。コロナが流行する以前に約束していた「ラーメン作ろう！」を実現させたい。なぜなら、交流している利用者さんが高齢で、できることが徐々に減ってきているから。



この事業で得たことは、交流とは「話すこと」だけではないということ。「触れる」「耳元で喋る」「見せる」「やってみせる」等、複数のやり方があると思う。また私たちの交流では、会話がとぎれて間ができることもあるが、学校で学生間で自然に会話しているのと同じような交流で良いと思っているので気にしていない。また印象的なこととしては、今まで3人が1画面でそれぞれが小さく映っていたが、現在は施設が増えたため1画面に1～2人となり、利用者さんの発語も増えてきたこと。施設が増えたことで日程調整や画面操作はやや複雑になったが、利用者さんたちは久しぶりの仲間と出会え、同窓会気分が楽しいようだ。

今後については、「お友達」の世代交代もあると思うが、今交流している利用者さんたちが、新しい「お友達」と打ち解けることができるかが課題だと思う。この事業の継続のためには、新しく参加する「お友達」は、できれば3・4年生ではなく1・2年生からの方が良いと思う。

●しおりさん



最初は授業やサークルとの両立が心配だったが、普通に友達と学校で話すのと同じように、人と定期的に話をする関係が作れたことが楽しかった。お互いに緊張もしたが、少しずつ笑顔が見れたり相手との距離が縮まっていくのを感じるのが嬉しかった。

交流が始まってすぐにコロナになったが、コロナ禍では学校の授業もオンラインのみ（それも学生はビデオオフ）で大学の友達とは会うことも話をすることも出来なかった。そんな中で月に一度のリモート交流は、定期的に友達と話をする貴重な機会でも、自分自身が、毎回とても楽しみにしていた。利用者さんの笑顔にほっこりすることが多かったのが、この事業を通じて得たもののひとつだと思う。

課題としては、交流の時間が平日の日中だけだったので、皆の予定をすり合わせるのが難しかった。夜間等柔軟な時間設定であれば、気軽に参加できると思った。

今後については、就職するため時間の制限はあると思うが、せっかくの楽しい時間なのでこのままのお友達関係を続けていきたいと思う。社会に出ると大変なこともあるかと思うが、利用者

さんとお喋りして癒されたいと願う。また、面会だけではなく、ビデオレターのやり取りもしたい。

● さやかさん



楽しいと思ったのは、利用者さんの好きなことを知って、それが自分自身が好きなことと同じだったこと。また、利用者さんが交流の回数を重ねる中で、ご自分から意思表示をされるようになったこと（お友達が「〇〇好きですか？」と質問すると、「大好き！」とご回答された）。活動を通じて、利用者さんとの関係性も徐々にできてきたと感じる。課題としては、なかなか頻繁には訪問しづらい施設との物理的な距離のことがある。でも対面での交流は楽しいのでこれからもなるべく訪問していきたい。また、「交流は楽しい」と感じているので、今後は利用者さんの意思をどう引き出していけば良いかを考えたい。そのためにも職員さんとの活動振り返りや話し合いの機会を設けていきたいと思う。今は、この活動の土台を築いた先輩たちの様々な軌跡を吸収したい。また、東洋大学のこの活動のための組織「LEAF」を、もっと気軽に参加できる場所にしていきたい。

● けんたさん

交流を通して 毎回、利用者さんの色々な面が知ることができ、こちらが元気をもらえていた。利用者さんのスポーツに対する本気度がわかり、その気持ちに動かされて、自分も「これ一緒にしたいな」と思うようになった。ご本人がまわりに影響を与える力がある。そんな利用者さんが地域に出れば、その可能性がもっと広がる。



意思決定支援会議に呼んでもらえたことは嬉しかった。また、普段話していることについて、その場で「東洋大学行きたい、学食食べたい」という声が本人から聞かれたことや、手紙をもらったりレスポンスがあったことが嬉しかった。その人それぞれのレベルにあわせた意思表出の方法や交流の仕方ってあると思うと、出会いが楽しい。

双方向のコミュニケーションを実現するための職員の橋渡し（本人が会いたいといったときにあったよ、〇〇さん会いたいって言ってたよ、と学生に直近で伝えてくれるなど）は必要。この事業における「職員の役割」は、職員間での共通認識だと思う。さらに、学生の間でも障害理解を促進する学習の場は必要。講演やトーキングマットなどのような研修など具体的な講義が、「障害理解」への手助けになったと感じている。

発語が困難な方だとどうしても学生が交流に難しさを覚え、続かなくなってしまうことがある。具体的な話があることが、障害理解であり施設でのお友達事業の本質につながっていくと思う。

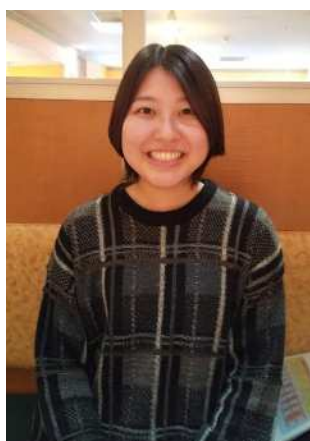
また、スマホやタブレット活用がもう少し検討されてほしい。ふと会いたくなったときに、おはよう・おやすみのSNSをして、それをお友達が返すだけでも不安を解消されたり、友だちと

話せたという思いにつながるのでは。なぜスマートフォンやタブレット等を活用したコミュニケーション支援がもっと行われたいんだろうという疑問はある。利用者さんと常に「感動」をシェアしたい。

この事業がもたらしたことは、「ボランティア」でもなく「専門職」でもない、対等な関係が構築できたことだと思う。支援会議の場への「お友達」の参画を通じた支援の可能性の広がり。意思決定支援会議に“代弁者”としてお友達が参画することで、その人の新たな可能性を関係者でシェアすることができた。施設職員へ新しい利用者観を発信できたと思う。

今後については、個々の利用者一人一人に合った今後の関わり方があるのではと感じる。お友達の「引継ぎ」という言葉への懸念もある。県や園にはぜひ交流の「交通費」のサポートをお願いしたい。交流の継続につながるかどうかはここにも尽きると感じている。また、活動内での事故等に係る保険の整備も必要である。

●ひよりさん



利用者さんが、「ひよりさんって、将来色んな人に好かれると思う」と言ってくれたことが、就職で悩んでいた時だったので、とても嬉しく、励みになった。逆に課題だなと感じたのが、利用者さんの好みはだんだんわかってきたけれど、会話を広げられずに単調な受け答えになってしまったこと。もっと共感できる話題作りをした方がよかったですのでは…？

リモート交流だと、限界も感じてしまう。でも、この活動を経験したお陰で、就職の実習先で障がいのある人と接した際に、「ちょっと個性的な人」だけど、普通にフラットに友達として関わることができると感じた。自分の目で見て、まずその人を知ることが大切。そうじゃない他の実習生の人たちは、まず「障がい者の特性」から、その人を知ろうとしていた。今後の活動については、グループのメンバーと話し合い、今交流している利用者さんと切れないようにしていきたいと思う。ちょっと気になったのは、グループホームを利用したいと言っている利用者さんの会議で、参加している他の人たちがその利用者さんに向かって、「(現状は〇〇なのに)本当にできるの?!」と問い詰めていたこと。ちょっと怖い感じがした。今後、機会があれば、その利用者さんのグループホーム見学などに一緒について行きたいと思っている。



3 みんなで語る！～お友達懇談会～

2022. 11. 12



S ネット：さてそれでは、お伝えしたように、この事業が今後引き継がれていく場合に、「こんなことって大事だな」と、思うことがあったら教えてください。単に楽しかったことでも良いです。

お友達①：私は今、二人の利用者と交流してます。お一人はサッカーがお好きな方です。みんなもそうだと思うんですが、交流に職員さんが入ってくださることで非常に助かっています。オンライン交流をやるようになって特にそう思うんですが、利用者さんの言葉がなかなか聞き取れなくて、気まずい雰囲気になった時に、「こういう風に言われてるんですよ」と代弁してくれたり、間に入って仲介してくれることで、とても助かっています。ただ、反面やはり「職員さんが言われていることイコール利用者の言葉じゃない」と、思うこともあります。そういう時、ご本人が本当はどのように思っているか…？でも、交流が楽しい場になれば一番良いんだと思います。職員さんが入ってくれることが、交流をしていく中でかなり励みになってます。

S ネット：職員さんが入っていくことで、逆に「う～ん？」となってしまったグループもありますが、BOYS（グループ名）の場合はうまくいったんですね。

お友達②：私はコロナ感染が広がってから活動に参加したので、いつもリモート交流で、職員さんが間に入ってくださるのが主流なんだと思ってました。

S ネット：確か職員さんの交流への参加の仕方、引いてしまったグループがありましたね。

お友達③：私のグループは現在、言語でコミュニケーションのできない方が2名と、今日お会いするAさんの3人と交流してます。例えばAさんと職員さんがいなくても大丈夫。だけど、他の利用者さんの中には、パソコンからの音声だと私たちお友達のことを認識できない人もいた。だから、言語でコミュニケーションできない方には、職員さんに間に

入ってもらって、自分たちの言った同じ言葉を繰り返してもらったり、「利用者さんはこう言ってますよ。」と通訳してもらいたいな、と書いてました。それを自然にできる職員さんもいたし、交流には一切かかわらずに横に座っているだけの職員さんや、逆に介入しすぎている職員さんもいた。あと、それぞれの職員さんによって、どういう目的でこの活動をするのか、という認識に差があったけれど、そういうことを逐一説明することもできなかった。

お友達④：この前の交流で、職員さんも同じ話題の中で交流しているメンバーの一人だと感じた。職員さんの方にも同様の気づきがあったと思います。「(交流って) こういうことだったの？」みたいな。そういう雰囲気があるならやっていけるかな、と思います。

お友達⑤：私のグループの利用者さんは、コミュニケーションのとれるBさんとそうでないCさんです。Dさんとは、お喋りして同じ趣味の話をしたり…。コミュニケーションのとりにくいCさんには、動画を用意して反応を見ながら交流します。動画の中で青い紙を振る場面とかがあるんですが、職員さんも青い紙と一緒に振ってくださったりと、サポートをいただいています。

お友達⑥：私たちのグループの2人の利用者さんはコミュニケーションのできる度合いがちがう。Bさんとの交流はお友達にまかせっきりだが、お友達を信頼してくださってるんだな、と、それはそれで嬉しい。Cさんの方が感情が読み取り辛いので、職員さんの助けを借りる場合がある。

S ネット：たまたまグループの学生さんに用事ができて、残った学生さんが一人になることもある。一人で交流できる場合もあるが、その場合はS ネットも入るので、声をかけてくださいね。

お友達⑦：私たちの交流している利用者さんたちは皆、高齢なので、ゆったり話をしています。お爺ちゃんとのんびりお茶を飲んで過ごしている感じ。それに、利用者さんが「〇〇さん、こう言ってるよ～」と、他の利用者さんの会話のサポートをしてくださることもあります。ただ、オンラインだと音声聞こえにくい時があるかも。

お友達⑧：私は「(利用者さんの) 帽子、カッコイイですねー！」とかいう風に、ただただ楽しい、ということで交流やっています。ただオンラインだと先輩たちが言われているように、声聞こえにくいですね。あと、今、交流しているEさんは、だいたいの質問に「ハイ」と答えが返ってくるのですが、職員さんがDさんにわかるように聞き返してくださると、違う答えが返ってくることがあります。答えは「ハイ」だけど、真実の感情は違う。そういうことを教えてもらえる振り返りの時間は大事だなと思います。

S ネット：職員さんの対応では色々なご意見がありますね。利用者さんとお友達の間に関係的に入ってくださったり、利用者さんのお気持ちを「きっと〇〇なんですよ」と通訳してくださったり、また、お友達の一人として加わってくださることもある。



S ネット：さて、この活動も来年に向けて、今後どうするか考えていかないといけないけれど、「お友達が次々変わっても、とにかくたくさんお喋りをする機会があった方が良い人」「あまり人を替えずに長く心を通じ合わせたお友達と交流した方が良い人」など、お一人お一人違うと思います。それぞれのグループで、対象となっている利用者さんがどういう風に交流を続けられれば良いか、考えてほしいのです。

お友達⑨：Aさんの場合、関係性ができている職員さんと一緒にいる時になら、私たちが入ってもそんなに不安にならないと思います。

それと、職員さんの中には、「この方は（利用者さんへの対応が）上手いなー。」と思わされる方がいますので、そうした交流の核となるような職員さんの強みを活かして、この活動が続くようなしくみ作りをするのが良いと思います。

ただ、その方だけに負担をかけるようなやり方では続かない。それは学生の引き継ぎも同様で、「〇〇さんがいなきゃダメ」というやり方では、「気楽なお友達」はできないと思います。「継続していくためのしくみとカジュアルなお友達関係。」そうしたことのバランスのとれる方法を見つけ、弱い紐帯で、利用者さんの心に寄り添う。周囲もあまり負担が重すぎないようにやっていく。これを具体的なものにしていかなければ、と思います。

お友達⑩：最近感じているのが、「福祉の支援者は利用者をサポートするために目標を作るが、『友達』については、自分自身の（個別的な）目標しか作れない。」ということ。それを意識して焦らないよう頑張ります。

お友達⑪：初めはEさんと話をするのが難しかったけど、先日一緒にボッチャをして楽しかった。Eさんは最初照れていたけど、うまく誘導してゲームをする中でコミュニケーションが生まれた。Eさんはボール投げが上手くて、それを褒めたり、ゲームに勝って共に喜ぶことで、徐々にコミュニケーションができるようになって、楽しかった。ただ、これからまたオンライン交流なので少し不安もある。

S ネット：利用者さんのお好きなことが、その後のオンライン交流でうまく関わるきっかけになるのでは？カジュアルという話があったけれど、今はどうしても「時間のしぼり」があって難しい。「時間のしぼり」とは、交流が職員さんの勤務時間内に限られること。これが柔軟になれば良いと思う。施設の中で、職員さんの手薄な時間がそのまま、利用者さんの余暇にちょうど良い時間帯になっている。

お友達⑬：今は、施設訪問やオンラインでの交流に限られていますが、どこかで待ち合わせて一緒に出かける、という交流も良いと思います。例えば施設側で計画している外出に同行するとかすれば、職員さんの負担を考えた時に決してマイナスにはならないのでは？



4 「お友達プロジェクトをやってみて」

～ お友達プロジェクトSネットスタッフ懇談会 ～

2019年から準備を始めた「お友達プロジェクト」の事業を振り返るスタッフ懇談会を行いました。

日時：2023年1月26日（木）15:00～17:00

場所：Sネット事務所

出席：上杉、高橋、桜松、山口、江崎



江崎：この事業を始めた頃ほどのようでしたか？

山口：実際に現地に行っていて、利用者さんとお友達との「生」の交流で反応が見れて、楽しかった。利用者さんも最初は困惑していた。そのうち「楽しみに思ってくれている」、「待ってくれている」のを肌で感じてうれしかった。自分の息子よりもずっと若い世代のお友達がどんな思いで来ているのか、ぼんやりとでも知ることができて良かった。

上杉：最初に利用者さんのいる入所施設を見学するところから始め、ビデオを見たりパンフレットを見たり、障がいのある人に初めて出会うお友達に、交流を始めるまでの間、丁寧に時間をかけた。一人ひとりの利用者さんにお友達チームをマッチングして交流を始めたのだけれど、最初の頃、男性利用者で女子大生を触ってしまう人などがいて、マッチングはどうなっているんだとお友達から混乱する声が出た。

桜松：施設の方で「この人は塗り絵が好き」という紹介があっても、「ほんの数本線を書いてお終い」という感じで、お友達で絵の好きな人をマッチングしてもそれほど意味がなかったように感じた。本人がやる作業の中では「塗り絵には一応手を出す」というくらいの意味だったかもしれないけれど。

山口：利用者さんの年齢が高くて、利用者の好きな歌、懐メロをお友達が全然知らないことでビックリした。お友達と利用者の年齢ギャップが大きい。けれど、それが利用者から見れば「孫」、お友達から見れば「おじいちゃん」みたいな、一周回って（総合的に見れば）逆に「（おじいちゃんたち）可愛い！」といったリアクションがなかなか微笑ましかったりする。

山口：最近参加して来たお友達は逆に利用者のリアルな姿を知らない。最初のお友達はリアルに利用者に出会っていて、コロナでオンラインになったから、その辺の困惑はあったようだが、今の子どもたちはリアルを知らないで意外と最初からオンラインで大丈夫だったようだ。

上杉：オンラインで楽しませるのが上手な人がいる。

高橋：自分が30歳くらいの頃を思い出していたんだけど。当時、特別養護老人ホームで生活相談員をしていたね。「老人ホームはお年寄りの家なので、近所の人や友達も遊びに来ればいいんだ」と思っていた。老人ホームは福祉施設だからボランティアしか来ちゃいけないなんてことはないんだと。おじいちゃんやおばあちゃんの家に行くとき「遊びに行く」って言うじゃない。今回、高山直樹さんが学問的に「弱い紐帯」という言葉で理路整然と整理してくれて。当時のぼくはけっこう的を得ていたんだなと思った。親とか施設とかといった強い関わりではない存在も大切なんだと。意思決定するにはそういう環境が必要なんだと高山さんは明確にして

くれて。やはり、50代くらいで特別養護老人ホームで勤めていた時にも、お話ボランティアに入ってもらうために「傾聴とは？」などの講師をしていた時期もあって。今回「ボランティアではない、お友達が必要なんだ。」というテーマが見えてきた。従来のお話ボランティアという「そうですか！すごいですね！」なんて周りでタイやヒラメのようにわいわい盛り上げていっぱい話をしてもらい、施設の職員もそれを見て安心して、「ああ良い事やっているな、自分たち」で終わっていたんだろうけれど、今の大学生世代のことは良く分からないんだけど、やっぱり若者の可能性はすごいと思う。お友達同士で会話を作っていて、そこが居場所になる。その輪の中に利用者がいる。友達仲間がいる。すごいパワーなんだよね。振り返りのお友達の話で一番感動したのは、「ファミレスで友達5～6人で集まって話をしている時に、一人黙って寝ちゃっている子がいても、他の人が何か話をしているし。ふっと目が覚めてその時に興味のある話題なら乗るし、全然関係ない話をしだしてもいい。皆が一緒になって盛り上がる必要なんてなくて、寝ちゃってる子は寝てればいいんだよ。」と語ってくれた時。「これが本当のお友達プロジェクトだ」と思った。利用者との交流の時にも利用者さんが寝てるような時があって。この状態を見た施設職員が利用者を中心にしない状態は不謹慎だと思ってしまったようなことがあって。「寝ててもいいんだ、ここが友達の居場所なんだ」ってことを職員に伝えることは凄く難しいなと思った。

上杉：実際にその場面が何回か続いた時に職員の方から「利用者が置き去りにになっている」という指摘がありました。「この事業は利用者のためのものなのだから利用者中心でなくてはならない」というような雰囲気が凄くありました。

山口：女の子たちがとても楽しそうに話していて、そこで利用者さんが乗っかるのか乗っからないのか分からないけど、その空気感を共有しているという感じ。延々と女の子が、「これどうですか？」と新たなキャラキャラクターを紹介しているんだけど、私には全然分からない。「あっこれかわいいよね」と言いながら10個ぐらい好きなものを見せて、利用者さんはそのキャラを知らないんだけど、1個くらい「いいね」になる。それで、みんな楽しそうだったの。

上杉：最初の会の時に、初回の緊張もあったけれど発語がない人がカチコチになって大丈夫かなと思ったのだけれど、お友達がもう一人のお友達に声をかけて、二人が楽しそうな雰囲気を醸し出していた。こちらが複数というのはそういう意味がある。

山口：利用者さんを置き去りにしているわけでもなく、利用者さんに合わせているわけでもない。その楽しい空気感で、利用者さんが最終的にはニコリしていた。

高橋：こっちが複数というのはミソだね。

山口：あの楽しそうな空気感は、若い子独特のものかなあと感じる。私たちにはできない、あんな風楽しそうにはしゃぐなんて。

上杉：若いお友達の側からは、お友達は何も学生に限ったわけじゃないですよという話が出た。色々な世代の人がいて良いという話が出た。

山口：それはいろいろな世代がいて良い。でも若い世代の方が、こり固まった概念的なものがない。我々が単独でお友達に入るとどうしても傾聴ボランティアになってしまう気がする。

高橋：しっかりした障がい支援があって、専門性がある所に住んでいて、その上で友達として遊ぶ部分がある。どっちが良いとかどっちが正しいというのではなく、しっかりと生活を支えてく

れている環境があるということ。横浜スタジアムに野球を見に行った時も、ちゃんとヘルパーがついてお友達が行くのが正解だろうなど。ケアは専門家に任せて、友達は遊ぶことに専念してしまっただけが良い。その代わりケアする人は黒子に徹さなければならない。

上杉：今回オンラインで、発語がない人がいっぱいいたので、職員がついてくれないとコミュニケーションもできないという状況があった。

高橋：そういう意味で、職員がやるべきことと、お友達がやるべき事ははっきりして、よかったのではないかな。

江崎：あの人里離れた施設を見てしまうと、関係者ではない人が入って行くというのはとても大事な事だと思うのね。で、もっと言っちゃうと、遠い所からよりも、あの近隣に居る人だと、気軽に思いついた時にフッと訊ねて行けるのでは。

この事業の意義

上杉：対等な関係が意思決定に資するものだ、ということを実感できました。誰にも「ああしたい」と「こうしたい」という、相反する思いがあり、そこを支援者がどっちかに決めて判断してしまう。それも支援のしやすさをどうしても優先して考えてしまう。意思是揺れ動き、変わっていくもの。実は意思決定支援って、そういうことに寄り添うことで、結構奥深いものなんだと思った。

桜松：思ったけれど、決めた翌日くらいだったら利用者が違うことを言い出しても変更できるけど、意思決定支援会議で計画がしっかりできてしまった後だったら、1年後には変更できるかもしれないけれど翌日には変更はできない。

高橋：計画自体は絶対じゃないんだよね。誰かが決めて、「こう決めたじゃん！」とか言われちゃうと、利用者本人としては「冗談じゃないよ」となる。だから、私たちができるのは意思表出環境作りでしかないし、利用者の意思是、その瞬間その瞬間でコロコロ動くんだよ。それで良いと思うんだよね。

高橋：寄り添うのもそうなんだけれど、お互いに思いを出し合う中で自分の意思が決まって行くという、さっきのファミレスで寝ている子の話ではないけれど、皆が「ピザだ、ドリアだ、スパゲッティだ」と言っている中で、自分はハンバーグが好きで食べたいと思っていたけれど、食べてる人を見て「ドリアも良いな」と思ったりする事ってあるよね。皆が話す中で自分の意思で決まって行くわけで、意思決定支援というのではなくて、お互いに意思を表出する中で、自分の気持ちがどちらかに向いて行く。「太い紐帯」と言われる人がいるところだと「あなたお肉が好きだからハンバーグね」と言われ、「今は魚が食べたいのに言えない」とかになるので、やはり絶対に「弱い紐帯」が必要。

上杉：「言ったことに責任を持て」と言われるのが厳しい。支援する側から言わせれば振り回されまくるから、どこに落とし所を付けるか良く分からない。

高橋：オープンダイアログは、皆対等でお互いに色々なことを言う中で障がい当事者の統合失調症が落ち着いて行ってしまう。治療法のように言われているが、実際にうまく回っているミーティングはオープンダイアログ状態になっていることが多い。専門職、医師、看護師も入っているのだけれど、権威ではなく一個人としての発言になって行くので、友達に近いなあと思っている。

上杉：オープンダイアログは、結構重い精神障がいの方が参加しやすい所で、医者や色々な関係者が、必ず本人を交えて、集まって円陣でミーティングを頻繁に持つというもので、本人の預かりしらない所で何かが動いて行ってしまうという不安が解消される。それが大本かもしれないけれど、その安定感の中で、薬いらずで、非常に状態が改善していくというもの。そこにつながるんですね、この活動が。

高橋：お互いになら平等な関係で…。

桜松：障がい者であるかどうかはさておき、人間、つまらない話でも話す機会があるということが大事。コロナでそれまで友達と会っておしゃべりすることが月2回位あったのが、1回もなくなってしまうと、愚痴をこぼすところもない。そうすると私も不満がたまるし、大した話はないけれどお茶飲みするとストレスが発散される。お茶ではなくても、道端で立ち話だけでもご近所の人とコミュニケーションを取ることが精神安定につながる。女の人はそういうあまり意味のない事をお喋りをしているけれど、男の人はそれが無いのでは。

高橋：男は道路でばったり会ってそこで1時間も立ち話というのは無いかもしれない。

山口：男の長話とか長電話はあまり聞かない。

桜松：女性のお喋りは、キャッチボールにならなくてもいいんだそうです。言いたい事を言うだけで気が済む。話題が飛んでしまっても良い。

上杉：そこに男女の性差があるということか。お友達プロジェクトで女性ばかりが残ったというのもそういう事情があるのかもしれない。



江崎：何でもない話が大事。

上杉：何でもない話が意外と難しい人もいる。

桜松：場所が離れているので「こちらは晴れているのに

津久井は雨ですか？」などという話も多い。「お昼何を食べましたか？」とか、「最近何をやりましたか？」とか、クリスマスだと「何をもらいましたか」とか。あと季節の話題とか。

山口：テレビの話題とか。利用者さんが時代劇の話をするけれど、3チャンネルでお昼頃やっている時代劇を見ている。「大岡越前」とか。

高橋：「相棒」とか「科捜研の女」とか昼間のテレビ番組の話をしている。ゴールデンタイムの午後9時とか10時とかは見れなくて再放送を見ている。

上杉：土日交流と、寝る前交流をしたい。食事をしてお風呂に入って後は寝るだけというのんびりした時間に交流をしたい。グループホームでオンブズマンをしていた時、ご自分の部屋にお客様として招かれて、ご自分の空間で自由な話をして、話が長くなるということがしょっちゅうあった。

高橋：正にお友達だよ。

山口：土日交流を申し入れたら、土曜日の10時という指定が来たけれど、お友達も土日に遊びや計画があってもなかなか実現していない。夜の寝る前交流だと卒業してもオンラインでできるのではないかと。職員には負担かもしれないけれど、桜松：自分のスマホがあれば職員がいなくてもできる人もいます。そういう人は職員を間に入れなくても良いのではないかと。

山口：それは本当のお友達だよ。課題は施設がフレキシブルに対応してくれること。

5 交流について施設からの感想

芹が谷やまゆり園

お友達プロジェクトを通じて、私たち職員も多くの気づきや学びを得ることができています。おともだちとの会話、場や時間の共有…それらを通じて表現された様々な利用者の方々の言葉や表情等はとても印象的でした。

特に印象に残ったのは、おともだちと長く会えなかった日々の中様子を気遣うような姿が伺えた場面です。直接的な交流場面だけではなく、離れていても何気ない時に相手の存在を気遣っている姿…。利用者の方々にとって大切な繋がりがまた一つでき始めているような印象を受けました。

このような場面を通じて「利用者の方々」と「繋がり」を作っていくこと。このことも私たち職員の大変な役割であると感じました。

本人にとっての「繋がり」の大切さや重要性を私たち職員自身もしっかりと理解し橋渡しを出来ると思いいます。

今後、利用者の方々とおともだちとの関係・関り方はより個別のかつ自然体へと育まれていくと良いと思います。また、その過程の中では「職員がいない場面」「施設の外」等での交流へのおもいも増えていくと思います。このことは、おともだちPJとして描く姿としては理想的に思います。

しかし、施設で生活している方々とおともだち。大切な関係である意義を理解しつつ、実態としてはまだまだ整理しなくてはならない「課題」もあります。例えば職員不在時や施設外での「事故」等への備え・対応。その責任の所在は…等の声も聞かれます。

このことは「おともだち」に限らず、施設で生活している方々がインフォーマルな資源等と繋がる際の障壁にもなりかねません。

常に施設に帰属している存在としての「利用者〇〇さん」と「おともだち」ではなく、「一人の〇〇さん」と「おともだち」…。今施設にいることは本人の一部であり全てではない…。この当たり前のように当たり前が出来ていないこと。

このことを施設・職員だけではなく、本人と関わる多くの人・資源と一緒に向き合い考えていかれたら良いと思います。またそれらを一緒に考えていく「繋がり」をこれからも多岐に広げられるよう私たち自身も歩んでいかれたらと思います

このプロジェクトに参加させて頂き職員としても感謝しております。

津久井やまゆり園

令和元(2019)年より始まった取り組みですが、施設の外の方との関りが少ない利用者さんにとって、当初は戸惑いも多かったと思います。学生さんとの対面でのお話から始まり、例えば野球の好きな利用者さんはキャッチボールでの交流など徐々に交流は深まり、毎回の交流を楽しんでいます。

令和 2(2020)年に入り新型コロナウイルスが猛威を振るい、交流も対面からリモート(Zoom)に変わりました。横浜・芹が谷で生活していた利用者さんの約半分は相模原・千木良へ生活の場を

移したこともあり、離れた場所どうしのやり取りが容易というリモートの利点を活かした交流が続いています。

便利なりモート交流ではありますが、やはり直接会って交流したいね、という話が利用者さん・学生さん双方から上がり、感染状況が落ち着いた令和4(2022)年11月に学生さんが来園し、テーブルを囲んでの会話や、一緒にゲームをして過ごす機会を作ることができました。

交流を通じて利用者さんの笑顔も増えたことと同時に、学生さんも交流を楽しんでいる様子が印象的でした。学生さんにとっても障害のある方との交流は今まで少なかったとお聞きしており、この交流は障害のある方への理解に繋がり、共生社会の実現に向けての役割を担っていると実感しています。

今現在関わって頂いている学生さんは卒業後もお手紙などでの交流を続けて下さるとのことですが、新たに関わって頂ける学生さんの掘り起こしも必要かと思えます。また、学生さん以外の方にもお友達として関わって頂ける方が増えればいいのですが、この点は今後の課題だと思えます。

カビーナ貴志園

お友達事業開始直後の状況としては、利用者の理解度や何を目的に行うのかについて説明することは、大変難しいと感じていました。実際にコロナ禍の中、対面ではなく映像を通しての交流は、利用者自身もイメージが持ちづらい状況を感じていました。毎月の顔合わせを通じて、徐々に利用者も学生との会話や一緒に過ごす時間を楽しみにしている様子も感じることができるようになり、職員としても利用者同士、職員との会話とはまた違う一面を見ることができました。その中で、学生の新たな発想により、利用者の好きな歌をその場の発言から検索し、一緒に歌うといったことは今まで考えつかなかった発想と感じました。実際に直接対面できる機会が訪れ、その際には、画面を通してではなく直接なかなか言葉が出ない状況の中でも、その場の雰囲気を利用者も職員も感じることができたことは収穫と思いました。パソコンの準備よりも会場を利用者と共に準備することや、実際に学生が来た時に迎え入れることなども対面の中で今まで感じるものが難しかった経験と思えます。事前の調整には、コロナの状況で急遽延期などご迷惑おかけしてしまう事もある中で、柔軟に対応してもらうことで継続できたこと、実際の対面の中で利用者が希望していた過ごしを経験できたことは、その後の利用者の生活にも潤いを与えてくれたものだと思えます。学生のフレッシュな視点や発想力、それを利用者と共に経験できる機会として楽しく参加することができました。学生が毎年変わってしまう事は避けられないことですが、継続的に利用者とは年代が近い方、職員とはまた違う視点で利用者に関わってくれる方は貴重な存在だと思えますので、その機会を今後も大切にしていきたいと思えます。

おわりに

2019年7月から準備をし始めた「(通称)お友達プロジェクト」は、年度が変わるごとに、その名称が更新されました。

「2019年度津久井やまゆり園利用者と学生や地域住民等との関係性構築による意思決定支援促進に向けたモデル事業」(令和元年度)

「令和2年度津久井やまゆり園利用者意思決定支援関係性構築事業」

「津久井やまゆり園利用者等意思決定支援関係性構築事業」(令和3年度)

「施設入所者個別交流促進事業」(令和4年度)

そして、この事業名称を見てもわかるように、平成28年7月に起こった、津久井やまゆり園利用者殺傷事件は、亡くなった人々を追悼する記念日であると同時に、知的障がいの人たちの意思決定支援を更に前向きに捉え直すターニングポイントとなったということです。

今回、神奈川県から委託を受けた当該事業を担う若い「お友達」の多くは、事件のあった年にはまだ10代前半であり、これから障がいのある人たちと共生社会を築く新しい世代です。

「お友達プロジェクト」を通じて、障がいのある人の意思決定が、自由で柔軟な関係性の中で、これからもずっと続いていくことを心より願っています。

NPO法人湘南ふくしネットワークオンブズマン

発行年月日 2023年3月31日

編集者 特定非営利活動法人湘南ふくしネットワークオンブズマン

発行者 神奈川県福祉子どもみらい局 共生推進本部室 意思決定支援グループ
(※ 6月から当事者目線障害福祉グループに名称が変わっています)

問合せ先 電話 (045)285-0554(直通)
FAX (045)210-8854
E-mail info_ishi.ap8p@pref.kanagawa.lg.jp

ともに生きる社会かながわ憲章

平成28年7月26日、県立障害者支援施設「津久井やまゆり園」において、大変痛ましい事件が発生しました。

このような事件が二度と繰り返されないよう、県と県議会は、ともに生きる社会の実現をめざし、「ともに生きる社会かながわ憲章」を策定しています。

ともに生きる社会かながわ憲章

- 私たちは、あたたかい心をもって、すべての人のいのちを大切にします
- 私たちは、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会を実現します
- 私たちは、障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します
- 私たちは、この憲章の実現に向けて、県民総ぐるみで取り組みます

平成28年10月14日 神奈川県



ともに生きる社会
かながわ憲章

KANAGAWA CHARTER for an Inclusive Society

ともに生きる

